

三島 日本大学

同窓会々報

第 27 号

平成 8 年 11 月 3 日
静岡県三島市文教町2
日本大学三島同窓会発行

平成八年度

常任幹事会・幹事会開催

◎常任幹事会

平成八年六月二十九日(土)十六時三十分から母校本館三階小会議室において開催された。

幹事会の運営や議事の内容について審議され、会報二一七号の発行や、平成七年度の決算報告並びに平成八年度の予算について、事務局長から報告並びに提案され、いずれも承認された。さらに本年は、三島キャンパス開設五十周年記念の年に当るため、学部

の募金事業委員に委嘱された、鈴木邦良会長・西村美枝子顧問(同窓会募金準備委員長)から、これを受けて同窓会としての募金活動事業計画が提案された三件が審議された。

一、昭和六十三年度発足した三島五十周年記念準備委員会を同実行委員会と名称変更し、西村準備委員長を実行委員長とする。そしてその他の委員の追加変更は委員長に一任する件。

二、募金については、同窓会として協力体制をとる事と、五十周年記念事業として、同窓会事業基金積立金の一部を学部へ寄付して、三島同窓会奨学金制度を制定する件。

三、同窓会名簿を募金事業趣意書の送付用資料として、各期・各学科別に出来ているところから事務局を通じて大学側へ提供する件。

以上長時間わたって審議され、一・三議案は承認されたが二議案の同窓会記念事業案は継続審議となった。

◎幹事会

常任幹事会に引き続き、六月二十九日(土)十八時から幹事会が開催された。

久保田勝常任幹事の司会により進行され、鈴木邦良会長挨拶の後、議長団・書記が選出された。議長に山内茂氏・副議長に染谷徳昭氏、書記には廣岡達郎氏がそれぞれ選出され、次の事項が審議された。

- 一、平成七年度事業報告
- 一、平成七年度決算報告

- 一、監査報告
- 一、開設五十周年記念に係わる事業について
- (一)五十周年記念実行委員について
- (二)募金について
- (三)名簿について

- 一、平成八年度事業計画(案)
- 一、平成八年度予算(案)
- 一、各科活動状況報告
- 一、その他

なお、事業報告・事業計画案については佐野勝己事務局長・決算・予算案は、宮川守常任幹事(会計担当)から、それぞれ説明があり、監査報告は土屋忠得会計監査から報告があり、いずれも承認された。

開設五十周年記念に係わる事業については、鈴木会長から実行委員の件(前述のとおり)が諮られ承認された。その後、西村満男顧問から、大学側を代表して、記念行事(式典、記念日の募集、留学生と高校生の英語スピーチコンテスト、学生懸賞論文の募集など)の紹介と募金事業主旨の説明があった。

募金事業については、佐野事務局長から、一部前述されているが、同窓会長・副会長・西村顧問が大学の募金委員を委嘱され、去る五月二十八日に第一回目の委員会が開催された事や、これを受けて、顧問を含めた同窓会役員会を六月十四日に開催し、大学の募金事業に協力する旨の確認が得られた事の報告があった。また、同窓会の名簿も、大学からの募金趣意書送付用に、出来ている各期・各科から、事務局を通じて大学へ提供する事の確認も得られているとの報告があり、いずれも承認された。

各科活動報告については懇親会にて報告して頂くよう議長からお願いがあり、幹事会は閉会された。

幹事会に引き続き、同会場にて懇親会が開かれ、瀬川一男顧問の乾杯により盛大に行われ十一月三日(日)の総会に集結するとのお互いの意志をかため散会した。

ご挨拶—50周年を迎えて—



国際関係学部長

秋山正幸

同窓会の皆様にはますますご健勝にてご活躍のこととお慶び申し上げます。

平成8年に日本大学三島キャンパスは開設50周年を迎えることになりました。わがキャンパスは、昭和21年6月15日、日本大学三島予科として発足しました。昭和24年4月、新学制発足に伴い、三島予科は三島教養部となり、昭和33年には法学部、文学部、経済学部、商学部、理工学部の一一般教育課程が設置されました。その後、三島教養部は文学部(三島)となり、昭和54年には待望の国際関係学部が設置されました。その間に、短期大学部各科(現在の文学科、商経学科、生活文化学科)や日本大学三島高等学校が設置されました。また、昭和30年4月から10年間、岩手医科大学の委託を受けて、同大学の一般教育課程の授業を行ったことは記念すべきことです。昭和39年に短期大学部に建築科と機械科を増設しましたが、昭和54年に国際関係学部が設置された折に、建築科・機械科は廃止

されました。この両科から巣立った多くの有為な人材が現在社会の第一線で活躍しています。

昭和58年には大学院国際関係研究科修士課程を設置し、平成8年には念願の国際関係研究科博士後期課程を開設することができました。現在、三島キャンパスでは高等学校から大学院博士後期課程に至るまでの教育を行っており、一大総合学園の役割を果たしております。

10月5日には三島キャンパス開設50周年記念式典を挙行しました。式典の際に、50周年記念事業として企画されたロゴマーク、外国人留学生日本語スピーチコンテスト、高校生英語スピーチコンテスト、学生・生徒懸賞論文の入賞者の表彰を行いました。

また、50周年記念事業の一環として、特別記念講演会を企画しました。10月17日には、「地球再発見による人間性回復へ」という演題で白川義員氏の講演会が行われました。山岳、聖地、大陸をテーマにした壮大な仕事に取り組みしてきた写

真家白川氏の講演に聴衆は深い感銘を受けました。さらに11月7日には、ラトヴィア国際問題研究所長のアティス・レインシュ氏による「欧州統合とバルト諸国」というテーマの講演会、11月22日には古橋廣之進氏の「スポーツとわが人生」というテーマの講演会が開催されます。

今、50年前の青春時代の日々を脳裏にうかべると感慨無量なものがあります。当時、校庭にはペん草が咲き乱れ、戦後の荒廃した様相を呈していましたが、校舎も校庭もだんだん整備され、木造校舎が鉄筋コンクリートの校舎となり、現在は見違えるような学園になりました。

開設の頃、私は一学生として学泉寮で生活していました。食糧難の時代で、寮生たちは空腹のため勉強に身を入れることができない夜もありました。寮生たちはどこからか食糧を調達してきて、お互いに分けあつて空腹をみたしたものです。昭和22年には、食糧事情が悪化し、6月末日で授業を終了し、夏期休暇に入ったことを私は思い出します。

50年前、三島予科設置の際には世田谷予科長の野沢竹人先生が三島予科長を兼任し、鈴木昇六先生が三島予科事務長に就任しました。3か月後、呉文炳先生(第4代総長)が三島予科事務取扱を兼任し、

その後、秋葉安太郎先生が三島予科長に就任しました。発足当時は、秋葉安太郎先生と鈴木昇六先生が車の両輪となつて、三島予科の運営にあたられました。

戦後、日本人全体が虚脱感に襲われ、経済的に困窮している時に、日本を担う若者の教育に情熱を傾けられた秋葉安太郎先生(元日本大学学長)、鈴木昇六先生(元日本大学理事)をはじめ、安藤公平先生、玉津徳太郎先生、当時の関係教職員の皆様にかかる感謝と敬意を捧げてご挨拶いたします。

キャンパス50年の歩み

昭和21年6月	大学予科を三島校舎に開設。
" 24年4月	新学制発足に伴い、三島予科は三島教養部(法・文・経・工学部)となる。
" 25年4月	短大経済科(現商経学科一部)設置。
" 28年11月	(但し、一部は33年から38年まで経済学部校舎のみ授業)
" 30年4月	日本大学三島同窓会結成。
" 33年1月	岩手医科大学進学課程設置
" 34年4月	三島教養部は文学部三島校舎となる。
" 37年3月	この年から法・文・理・商・理工学部の一一般教育の授業を一年に限り三島校舎にて実施。
" 38年4月	短大栄養科(現生活文化学科食物栄養専攻)を設置。
" 39年2月	短大栄養科を家政科に改称。家政専攻(現生活文化学科生活文化専攻)を増設。
" 41年3月	生活科学研究所設置。
" 41年4月	短大商経科(現商経学科一部)再開。短大建築科・機械科を設置。
" 41年6月	岩手医科大学進学課程廃止
" 53年12月	短大文科現文学科国文専攻・英文専攻を設置。
" 54年4月	三島学園開設20周年記念式典挙行。
" 54年10月	国際関係学部設置。
" 55年7月	国際関係学部授業開始。
" 55年8月	国際関係学部図書館が国連寄託図書館に指定される。
" 58年4月	国際関係研究所設置。
" 60年11月	短大建築科・機械科を廃止。
" 63年3月	大学院国際関係研究科修士課程設置。
平成元年11月	国際関係学部図書館がEC(現E.U.)資料センターに認可される。
" 8年4月	経済学部三島校舎に法・文・理・商学部一般教育科目授業終了、但し法学部三島校舎授業は平成4年3月まで)
" 8年10月	国際関係学部10周年記念式典挙行。
	国際関係研究科博士後期課程設置。
	三島キャンパス50周年記念式典挙行。

会長就任にあたって



三島同窓会会長

鈴木邦良

日本大学三島同窓会員の諸兄弟の皆様にはますますご健勝にてご活躍のことと、衷心よりお慶び申し上げます。

この度渡邊勝一前会長より任務を引継ぎ、平成八年四月から第七代会長をお受け致しました。

三島キャンパス開設五十周年を記念する年に会長という大役を仰せ付かり、その責務の重要性を今痛感している次第です。

今迄の歴代会長の方々が敷かれた路線をそのまま継承し、この記念すべき時期を、微力ながらも皆様のご協力を頂き、この職務を遂行し、母校の発展に努め、次の世代の方々に無事にバトンタッチする事を第一目標として務めて行く所存です。どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

さて、去る十月五日(土)に三島キャンパス開設五十周年記念式典が国際関係学部八号館講堂で行われ、顧問・副会長の方々と同窓会を代表して出席させて頂きました。席上秋山正幸学部長や瀬在幸安日本大学総長から半世紀の歴史

い学生時代が過ごせたことと思っております。

そして、お伺いするところによると、現在は二一三、〇〇〇㎡の広大な校地の中に、四十数棟の校舎や体育館等の建物を有し、三、七〇〇名の在学生を数え、この三島の地において、名実ともに充実した教育機関として高く評価されていることは、同窓生にとって誇り高いこととあります。

更にこの半世紀の間、学部移行生五〇、六〇〇名が、このキャンパスを学び舎としてそれぞれの学部から卒業しており、そして、このキャンパスの学部・短期大学の卒業生は三万人を越し、いづれもさまざまな分野で活躍しています。

これも偏に、ここまでキャンパスを育て発展いただいた教職員関係者の皆様に感謝申し上げる次第です。

こんなキャンパスの歩みと共に、我が同窓会も、昭和二十五年に設立され、今年は四十七回目の総会となりました。また会報も、昭和四十六年に創刊され、本号は二十七刊目の発行となりました。

本会は、会員相互の親睦と融和を計り、母校の発展に寄与するなどの目的のもと、四十有余年、年に一度の幹事会や総会・懇親会を開き、また、各期や学部・短大卒業生は、それぞれの同窓会や桜文

会・桜栄会等を開催し恩師を招き会員同志との親睦をはかつておりますことは皆様ご存じのとおりでございます。

また、母校の発展興隆に寄与する諸事業についても、キャンパス節目の記念式典には、それぞれささやかではありますが、記念品を贈り設置してきました。

五十周年記念を迎える母校に、どの様に応えられるか西村美枝子準備委員長を中心に、会長職を歴任された顧問の方々と何度か相談してまいりました。また、大学との話し合いも重ね、今回は、その事業として「三島同窓会奨学金」を制定し、この記念行事のために、積立ててきた同窓会事業基金を大学に寄付して、その基金にして頂くことにするのはどうだろうかという意見が提案されました。

金額や奨学金規程等の詳細については、今後検討して行かなければなりません。国際関係学部校友会が発足され、短大卒業生もその傘下に入り、年月を重ねていくと、同じ大学後援団体でも、日本

大学校友会に加盟された学部校友会が中心になり、同窓会は同窓という仲良しクラブでしかなくなるという原理が生じる。そんな事も考えられる日が来る前に、大学に同窓会という名を残して頂き、昭和四十六年度に制定された三島同窓会奨学金規定に変わる

ものとして、母校及び本会の発展に寄与することの出来る優秀な後輩を育成するために役立てて頂きたいと思っております。

また、これとは別に、大学当局が、五十周年記念事業としてキャンパスのさらなる発展と、教育・研究内容の充実を図るとともに、財政基盤の確立と奨学制度の整備を目的として、奨学基金の設定及び海外学術交流基金・教育研究基金の拡充計画に、本会にも協力要請があり、西村美枝子顧問を始め副会長の方々と共に大学から募金委員会を委嘱されました。本会には、募金趣意書送付用の同窓会名簿の協力依頼があり、完成している期・短大同窓会からは既に事務局を通じて、提出してあります。どうぞ、この件についても、少ブロックでも結構ですので、幹事の方々で、お手持ちの会員名簿がありましたら、事務局迄よろしくお願ひ致します。そして同窓会役員のお力を頂き、この募金についても全面的に協力して行きたいと思っております。

どうぞよろしくお願ひ致します。



地方に進出して来た大学



清好一

終戦直後までの大学は、大都市を除いて地方の県には無かった。静岡県内の高等教育と言えば、浜松高専、静岡師範、磐田農専、そして静岡薬学校(薬専だったか?)などであった。

日本大学が三島に進出することを知ったのは、入学試験の僅か一ヶ月前の昭和二十一年四月であった。終戦(敗戦)直後の日本は混乱の暗い世の中に、目的もなくただ漠然とその日暮しで、私も希望し学んでいた航空研究所やその教習所に遭い、行く先もなく空虚な嘆きに酔っていた折、地方への大学の進出は本当に明るい光を与えてくれた。

昭和二十一年五月十五日、私立田方商業学校(三島駅裏の台地の)上にあつた)で願書の受け付けと入学試験が行なわれた。試験科目は理科と数学だけで英語は無かつた(旧制中学で英語廃止のため)ように記憶している。

募集人員も定かでないが理科一〇〇名文科三〇〇名程度か?。受験倍率は文科三倍、理科六倍ぐらいと聞いている。比較的募集人員

の少なかつたのは、後で分かつたことであるが駿河台や世田ヶ谷より多くの予科生が移行して来ると言うことからだ。

入試に集つた輩を(男性のみ)見てたまげた。旧制中学の新卒もいたが、軍服の復員兵や立派な八の字ヒゲを生やした陸軍将校、子供づれのオヤジ、背広にネクタイの学生社長そして飛行服に軍靴をはいた私など、年齢差の特に大きな異色な集団でつた。

日本大学工学部と言えば、当時の日本の技術を背負つて立つとまで言われていただけに、三島予科への希望は、直結の予科と聞かされて、どうしても入学したいと僅か一ヶ月の試験勉強であるが、夢中で学習したものだ。正式名は「日本大学三島予科理科甲類」であるが、私達理科の仲間は工学部予科と呼び、エンジニアの卵に夢を描いていた。

入学試験の一週間後(二十一年五月二十二日)合格通知が届き、五月二十八日には授業料を納入した。三島学園の二十年、四十年史の写真集の初頁にある合格通知と授業料納入の写真は、当時の私のもの

である。多数の志願者に対し、余りにも早い合格通知と入学宣誓式への出頭通知を受取つたことは、喜びと共に驚きでもあつた。又日本大学の学費がこんなに安い(年間六〇〇円)で国立と変わらず、重労働のアルバイトを一週間働けば十分にまかなえた)ものだと、未知の世界への驚愕でもある喜びを感じたものだ。

昭和二十一年六月十五日野戦重砲第三連隊の広場において、入学宣誓式が始まつた。野沢予科長の挨拶があつたが、馬糞で育つた草や軍隊の残品の山と多数の学生で、予科長の顔もおがめなかつた。続いて式の後文科三年生(理科は先輩がいない)の先輩達より上半身裸にされ、ストームと称する伝統の歌と踊りで歓迎の幕が開かれた。

六月十八日から授業が始まつたが、電灯も黒板も、机や椅子も無い暗い兵舎の床に座らされ、先輩の哲学論(予科生の意識と目的)が最初だ。理科は工学部の先輩が東京より出張し「若きエンジニア」の歌とエンジニアのプライドについての講義だ。正規の授業も、物理学だけで教科書は勿論無く、野外で草を踏み分けて「相対性理論」の話だつた。

六月下旬になり、東京から来た予科理科の仲間三百余名と共に、黒板も机も、図書もそして実験実習の施設も無く、教授陣容もそろわぬ環境で学問はできないと、理科の過半数の生徒の怒が爆発し、「東

京復帰運動」が勃発した。先生方も理解を示し、大部分の理科生が東京へ帰つてしまつた。しかし折角三島の地に進出した大学だから、何とか学園を充実したいと思う同志も百名足らずであるが居残り、再び授業が再開されたのが二十一年九月二十六日からだ。こうに顔をそろえたのが工学部三島予科と称する、理科の第一期生の九十六名の仲間達であつた。授業の再開には、お粗末ながら黒板や机も用意されたが、予科長をはじめ何名かの先生方も、どうしたことか姿が見えなかつた。その上一年次に学んだ学問は、物理と数学だけの学習で、語学や文系の教科は残念ながら学ぶことができなかった。

休講も多く、授業の合間の唯一の楽しみは理科校舎の裏手(連隊の最西端)にある練兵場でのすばらしい景観にひたることだ。松林を通り抜け、小さな土手を越え練兵場に出て弾薬庫の小山に登ると、三百六十度の視界が広がる。北を見れば富士山の裾まで人家も全く無く原野だ、南には緒明邸の森のかたに伊豆や天城の山々が、東は松林で多少見にくい箱根の連山が、西には香貫山の航空燈台とその先に千本松原、更に遠く南アルプスとその前衛の山々、ひとけの無いこれらの景観に魅了したものだ。時には仲間達と南アルプスのかなたに日が落ち、宵の明星が出るまで語り合った思い出も多かつた。

今日では男女共学で触れ合いもごくあたりまえのことであるが、当時は男所帯の異色の集団で、北海道から四国まで(地元は約半数)全国的な人達と、少なからず学びを共にできたことは、地方への大学の進出によるもので、敗戦後の暗い混沌とした社会に大きく光陰を残してくれたものと思う。

昭二十四年予科理科甲類修了
昭二十七年(旧)工学部卒
元本学付属高校 教頭
現 同校 講師



駿東二七会について



岩尾昭紀

私達は昭和二十七年、医学専門課程に進学する資格を得る為に、日本大学三島校舎に入學し二年間勉学に励みました。学制改革により当時の医科専門学校が医科大学となりました。大学となり教養課程、専門課程の併設が必要となりました。しかしながら当時の医専には教養部に当たるものがなかったのです。緊急処置として医学専門課程に進むには医学進学課程を修了した者、又は同等の単位を修得した者のみが入学する資格を得、入学試験を受け合格した者のみが進学が出来るようになりました。つまり医学部に進むには二回の入学試験を受ける必要があったのです。今の大学受験予備校にやや近いものでした。此の制度は間もなく無くなり、現代の制度になりました。我々の多くは此のような、うたかたの制度に玩ばれた犠牲者であるという認識を心の片隅に抱いています。此のような時代に二年間学んだ三島校舎は、皆さんが予備校に抱く気持ちに近いものでしかなかつたのです。

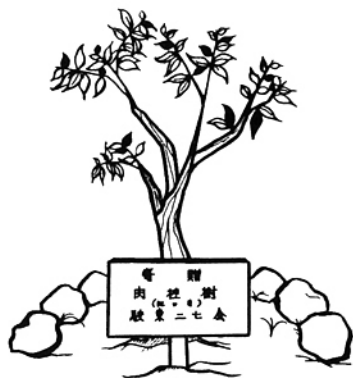
私達も年老いてまいりました。四十余年を経て、故人となった旧友の事を風の便りで知り、仕事の手を休めた時ふと旧友と競った当時のことを思い浮かべる事が多くなりました。丁度この時大変親しかった友のことが気になりました。彼は病気の為医科大学を中途退学をしました。幸い近くで彼と大変親しかった友人が開業医として元気に働いていて、私も親交がありました。そこで相談を持ち込みましたところ、探してみようではないかということになりました。古いメモを頼りに、数日後全快不可能な病状で郷里の病院に入院していることを確認し、遂に彼と会話することが出来ました。大変懐かしがり是非会いたい。これを聞き他にもこんな希望を持っている者が居るのでは？、二人して旧友を探して見てはどうかと考えは発展してしまいました。某医大の教授をしている友人にも協力を要請したところ、やりましようということになり暗中模索のかたちで出発

をしました。先ず医学進学課程に在籍していた者を把握するため三島校舎を訪ね、学生課の渡辺様の尽力を得て学籍簿より約三百名の名簿を入手することが出来ました。渡辺様には大変感謝しています。北は北海道、南は沖縄と全国津々浦々に散って四十数年経た今、地名変更、本人の移住、姓名の変更等さまざまな難問に妨げられ一年有余を経て約百五十名の所在を知ることが出来ました。其の中に故人となられた方が二十数名、それから三島時代のことは単なる通過点にすぎないのでお付き合いはしたくないので迷惑ですと断られる方も何人もいました。三島校舎で過ごした二年間は、それぞれ異なる思いを持って居ることを知らされました。平成三年に簡単な名簿が出来上がり駿東という名前を付け判明した者に送付しました。ところが反響が思いのほか大きく大変驚きました。一度会ってみたいとの要望が多く寄せられ、此のままに放置出来ないという雰囲気になってきました。意見を求めたところ三十名以上の者が旧友の情報を知りたい希望を持って居りました。

お世話になった青木久尚先生をお迎えて第一回の会合を持つことが出来ました。此の席で会の名前が駿東二七会と命名され、また会はオリンピック開催年に持つことも決まりました。しかしながら今日迄第二回、第三回が伊豆大仁、伊豆長岡に於いて二年おきに開催されました、結局二年に一回に変更され次回は平成十年に開催される予定です。第二回会合の時、三島キャンパス構内に、許可を戴けるならば記念樹を植えてはという意見が出ましたのを受け、学校当局にお話したところ快くお許しを戴き、第三回会合の平成八年七月二十日、佐野課長立会いのもと肉桂樹を記念樹として植樹を致しました。大変良い場所を選んで戴いたことを課長ほか職員の方々に深く感謝して居ります。

以上の経過をたどって駿東二七会が生まれ今日に至って居ります。私達は今後此の会を大事に育み守って行くつもりです。だがもう年です、三島校同窓会とは別のかたちの極小さな親睦会として続けて行きたいと思っています。尚此の会が生まれるきっかけとなった病床の友は私達と会うことなく平成六年一月十九日永眠致しました。非常に残念でした。彼の名前は原田(旧制大堀)博幸君です。彼の冥福を祈りつつ筆を終わらせて戴

きます。



とんぼ

伊藤 敦

治夫は寝苦しくて目を開けた。辺りを見回して驚いた。真つ白な部屋の中で、冷たい鉄のベットに横になっているのだ。こんな所で俺は一体何をしているんだ？起きてベットに腰掛けてみようと思っただが、思うように出来ない。ごそごそやっている、悦司が戸を開けて入ってきた。看護婦が一緒だ。―ここは一体何処なんだ？と弱々しい声で治夫が尋ねた。

―芹澤病院にきまつてらあな。

―病院？なんだつてまた病院なんかに？

―おや、君は何にも覚えていないのか？

―覚えてないね。

―ほら、昨日本田と一杯やつたら。―うん。

―その後で本田をやつこさんの家まで送り届けたな。

―覚えてるよ。

―そこでウイスキーを君が、みんな開けちまつたのを覚えてるか？

―それも知ってる。

―それから、君が十二号館の屋上に出て行ったのは？

―さあ、そのへんからがあやしい。あそこにはたしか穴が空いているが、俺はそこから落ちたのかい？

―いいや、君はあそこで俺たちに、「俺はとんぼだぞ」と言っただ。

だ。「ばかも休み休み言え」って言ったらさ、「それじゃ飛んでみせてやろう」という訳なんだよ。

―すると君達は、俺がそんなことをするのを止めようとしなかったんだな。

―止めなかったさ。俺たちも君が本当にとんぼで、飛べるんだとばかり思っていたからな。

…三島には、咄が似合う色があります。

国際関係学部平成7年度卒業
(平成7年度 同窓会長賞受賞)



挑戦

春原 昌子

私が日本大学短期大学部に入学してから、早くも一年半がすぎました。この大学生活を思いおこしてみると、本当に色々な事がありました。

親に無理を言い、地元長野県を離れ静岡三島という地に来ました。せつかくここに居るのだから、

自分の納得いく様に色々な事に挑戦しようと思心し、学生会CSA(旧クラス委員連絡会議)と富樫祭実行委員会に入りました。そこでは、様々な出会いをし、多くの事を学びました。私は、一年時に書記とクラ連事務局庶務の書記を担当しました。庶務の仕事では、

今までのこの大学を卒業された同窓会の方々をはじめとして、他大や他の高校などに招待状を発送するという重要な役目を務める事になりました。始め分からない事ばかりで右往左往している時に、先輩方や友人達に助言や協力をしていただき何とか無事に仕事を果たす事ができました。一人では無力でも多くの人が集まり同じ目標に向って協力し合えば、よりよい成果が得られるという事を痛感しました。

学習面において私が特に力を注いだ事と言えば、教員免許取得です。私は、中学の頃から英語が好きだったので教師という職業に憧れていました。この大学に入学する際、必ず教員免許を取ろうと決心していました。それから一年半がすぎ、先月無事に教育実習を終えました。辛く大変でしたが、滅多にできない貴重な経験ができました。また今と比べてみると、全てが良い思い出としてよみがえってきます。残念ながら卒業後は教師という職業には就きませんが、

今までの多くの出会いや経験を胸に社会人になろうと思えます。そこで常に自分を磨いていきたいです。このような素晴らしい土地で色々な事を学ぶ事ができ、誇りに思います。これからの半年間を悔いない様に過ごしていきたいと思えます。

短期大学部文学科二年
(平成八年度同窓会長賞受賞)



三島キャンパス五十年記念式典開かれる

昭和二十一年六月に三島の地に

予科としてスタートした日大三島キャンパスは、現在国際関係学部、大学院、短期大学部文学科・同窓会、短期大学部文学科・同窓会、経済学・同生活文化学、高等学、六、七〇〇名を超える学生が在籍するキャンパスとして本年開設五十周年を迎えました。

キャンパスでは、これを記念してさまざまな記念行事が行われ、去る十月五日(土)には、関係者

約七〇〇人が出席して、盛大に記念式典が挙行されました。

式典では秋山正幸学部長の挨拶、瀬在幸安総長の式辞のあと、石井茂三島市長や星猛静岡県立大学長の祝辞を頂き、半世紀の歴史を振り返るとともに、今後一層の飛躍を誓い合った。

引き続き記念事業として実施した、キャンパスロゴマーク募集で、最優秀賞に輝いたロゴの紹介と受賞者をはじめ、スピーチコンテストの留学生や高校生、懸賞論文の入賞者らの表彰式が行われた。

また式典に先立ち、午前九時三十分から、学生代表、学部長他、役教職員、同窓会長はじめ学校関係者ら同席のもと、十三号館校舎前で記念植樹が行われた。

春、新葉とともに紅色または白色の四枚の包に包まれた小さな緑色の四弁花を付け、新入生を迎えてくれるだろう、ハナミズキの木を植え、記念植樹標柱の除幕が行われた。



同窓会だより

国際関係学部同窓会

平成八年度の国際関係学部同窓会が平成八年十一月二日(土)十五時から三島駅前田代パレスにて開催されました。総会では会務報告・会計報告後新幹事の選任が行われ、三島キャンパス五十周年への同窓会としての協力についても討議がなされ満場一致で無事承認されました。

引き続き懇親会が、秋山正幸学部長をはじめ恩師の先生方や来賓の方々をお迎えして和やかに開かれました。参加者がやや少なかつたのは残念でしたが、今後も地道に活動を続けていこうということ全員で確認し、無事終了いたしました。

(文責 斉藤 聡)



桜文会



去る平成八年二月十七日(土)

十六時から短期大学部文学科の同窓会(桜文会)が、三島プラザホテルで開催されました。第二十七回を迎えた本会では、卒業を三月に控える二十九期生と多数の同窓会諸姉、そして、中澤俊郎短大次長をはじめ、多くの先生方のご列席をいただきました。山田浩子桜文会会長の挨拶のあと来賓としてお迎えした秋山正幸学部長並びに石井茂三島市長から丁寧なるご祝辞をいただいたり、余興の部では、現在道化師として活躍されている国文十九期生の田島百合子さんを迎え、楽しい一時を過ごし、盛大な総会・懇親会を開催させることができました。

現在事務局では、十年に一度発行の会員名簿の作成に取り掛かっております。平成九年三月の発行を控え、会員の皆様にご満足いただけるよう努めております。

桜文会を通じて、これからも会員の方々が交流を深め、新たな発展につながるよう心から祈つてやみません。

(文責 宇佐見京子)

商経科同窓会

平成八年度の商経科同窓会総会が平成八年十月十八日(金)十八時三十分から母校八号館二階において、五十余名の参加により盛大に開催されました。岩崎一雄会長の挨拶に始まり、事業報告・収支報告の説明があり、引き続き役員改選にあたり、新会長に前副会長の山崎光義氏、副会長に山口良児、染谷徳昭・津田正克氏、会計監査に金城二十二氏を、また三期にわたり会長職で活躍されました、岩崎一雄氏を相談役に推薦したいとの提案がなされ、いずれも全員一致の拍手をもって承認されました。開設五十周年記念関係の行事の説明、募金等のお願いが事務局よりあり、総会は終了した。

引き続き懇親会が開催され、会長挨拶の後、来賓を代表して短期

大学部部長であります中澤俊郎先生のご祝辞をいただき、小泉安三副会長の乾杯の音頭により和やかに会が進められ、お互いに近況報告など語り合い、有意義な時間を過ごしました。会は大いに盛り上がったところで、池谷雅雄氏の万歳三唱により、次回結集するとの意志をお互いにかためながら会は閉会されました。

(文責 久保田 勝)



桜栄会

桜栄会では、毎年会報「桜栄」を発行しております。今年度は三十一号を平成八年四月二十日に発行し、約七千名の全会員に郵送いたしました。当番期の方々を中心に作成し、特色ある会報をお届けできたことと思います。

平成八年七月十四日(日)には、第三十六回総会・懇親会が三島プラザホテルにて行われました。総会で年間行事報告、会計報告などを行った後、講師に瀬上豊子生活文化専攻非常勤講師を迎えて講演会が行われました。引き続き行われた懇親会は、六期・十六期・二十六期の当番期を含む約二十名の会員、秋山正幸学部長をはじめ恩師の先生方や三島同窓会からの来賓をお迎えして、なごやかな会となりました。

現在、十年に一度発行の会員名簿作成に取り掛かっており、平成九年三月に発行を予定しております。良いものを作成し、会員の皆様にお届けしたいと思います。

(文責 小澤知子)



平成7年度 事業報告

- 1 三島同窓会長賞授与
平成7年度日本大学三島キャンパス在学学生から、次の者が推薦された。
同窓会長賞(副賞記念品)は、国際関係学部1名、短期大学部2名に贈られ、平成8年3月25日の卒業式当日、帝国ホテルにおいて授与式が行われた。
同窓会長賞(副賞奨学金)は、国際関係学部4名、短期大学部3名に贈られ、4月9日の開講式当日授与式が行われた。
同窓会長賞(副賞記念品)3名
伊藤 敦(国際関係学科4年)
古屋美帆(文学科国文2年) 原田 愛(生活文化学科2年)
同窓会長賞(副賞奨学金)7名
田尻美三(国際関係学科3年) 青木 徹(国際文化学科3年) 沖倉保広(国際関係学科2年)
長田大介(国際文化学科2年) 春原昌子(文学科英文1年) 白井里枝(生活文化学科1年)
山瀬 匠(商経学科二部1年)
- 1 学園歌集発行
2,000部を発行し、平成7年4月国際関係学部・短期大学部各学科の新入生全員に対し入学祝いとして渡した。
- 1 会報発行
会報26号、平成7年11月3日付 10頁 3,000部を発行した。
- 1 各科同窓会等補助
国際関係学部同窓会・桜文会・桜栄会・商経科二部同窓会、及び大学の体育会に補助した。
- 1 常任幹事会
平成7年7月14日(金)17時から、国際関係学部8号館2階で開催した。
幹事会
平成7年7月14日(金)18時から、国際関係学部8号館2階で開催した。
- 1 総会並びに懇親会
平成7年11月3日(金)16時から、国際関係学部記念館で開催した。
- 1 箱根駅伝応援
平成8年1月3日(水)復路スタート地点及び第2中継点近くで応援した。

平成7年度 収支決算書

(平成7年4月1日～平成8年3月31日)

単位：円

支 出 の 部				収 入 の 部			
項 目	予 算 額	決 算 額	差 異	項 目	予 算 額	決 算 額	差 異
奨 学 費	350,000	1,021,630	△ 671,630	会 費 収 入	4,263,000	4,404,000	△ 141,000
学 園 歌 集 発 行 費	210,000	203,940	6,060	雑 収 入	320,360	521,111	△ 200,751
同 窓 会 報 発 行 費	180,000	205,000	△ 25,000	前 受 金 収 入	2,400,000	2,919,000	△ 519,000
各 科 同 窓 会 等 補 助	120,000	120,000	0				
学 生 団 体 補 助	400,000	200,000	200,000				
総 会 並 び に 懇 親 会 費	430,000	385,760	44,240				
会 議 会 合 費	300,000	288,037	11,963				
通 信 運 搬 費	50,000	20,000	30,000				
事 務 費	100,000	83,676	16,324				
雑 費	200,000	135,000	65,000				
予 備 費	700,000	0	700,000				
計	3,040,000	2,663,043	376,957	計	6,983,360	7,844,111	△ 860,751
基 金 繰 入 額	2,220,000	2,220,000	0	基 金 繰 出 額	0	0	0
次 年 度 繰 越 金	2,400,000	3,637,708	△ 1,237,708	前 年 度 繰 越 金	676,640	676,640	0
(前受金)	(2,400,000)	(2,919,000)	(△ 519,000)				
(繰越金)	(0)	(718,708)	(△ 718,708)				
支 出 の 部 合 計	7,660,000	8,520,751	△ 860,751	収 入 の 部 合 計	7,660,000	8,520,751	△ 860,751

貸借対照表

(平成7年3月31日現在)

単位：円

借 方		貸 方	
項 目	金 額	項 目	金 額
普 通 預 金	1,357,708	基 金	34,720,000
		(前年度繰越額)	(32,500,000)
定 期 預 金	37,000,000	(本年度繰入額)	(2,220,000)
		次 年 度 繰 越 金	3,637,708
		(前受金)	(2,919,000)
		(繰越金)	(718,708)
合 計	38,357,708	合 計	38,357,708

基金の内訳

単位：円

項 目	前 年 度 繰 越 額	本 年 度 繰 入 額	合 計
同 窓 会 事 業 基 金	27,400,000	1,620,000	29,020,000
国 際 関 係 学 部	5,100,000	600,000	5,700,000
校 友 会 加 盟 基 金			
計	32,500,000	2,220,000	34,720,000

平成7年度収支について、関係帳簿並びに証拠書類を精査いたしましたが、記帳その他正確であることを認めます。

平成8年6月29日

会計監査 山崎 光 義 ㊞
同 土 屋 忠 得 ㊞

幹事	土屋 仁	(27・28)	幹事	両角 勇	(42)	幹事	三枝 和彦	(46・47)
幹事	勝又 国信	(27・28)	幹事	濱田 義之	(45)	幹事	天野 寿一	(48・49)
幹事	青木 政利	(27・28)	幹事	高藤 省三	(49)	幹事	埜村 光伸	(53・54)
幹事	長沢 龍助	(27・28)	幹事	河田 敏明	(50)			
幹事	佐々木凱男	(27・28)	幹事	滝本 博	(53)	幹事	岩月 和男	(40・41)
幹事	川崎 一成	(27・28)				幹事	中山 義昭	(41・42)
幹事	丸山富美男	(28)	幹事	岩崎 尚枝 (伊藤)	(41・42)	幹事	渡辺 清	(42・43)
幹事	坂詰 正衛	(28・29)	幹事	小永井京子	(43・44)	幹事	赤池 哲也	(42・43)
幹事	望月 知林	(28・29)	幹事	平岩美知子 (金子)	(44・45)	幹事	深井 富雄	(45・46)
幹事	安東 安生	(29・30)	幹事	高橋真理子 (大場)	(44・45)	幹事	河田 哲雄	(46・47)
幹事	田嶋 文義	(29・30)	幹事	石井千枝子	(46・47)	幹事	西家 勝彦	(51・52)
幹事	寺崎 哲郎	(29・30)	幹事	勝亦 幾代 (古川)	(56・57)	幹事	勝呂 千明	(52・53)
幹事	関 哲男	(29・30)	幹事	鈴木三奈子	(62・63)			
幹事	林田 達郎 (中村)	(29・30)	幹事	宇佐見京子	(元・2)	幹事	加藤 晴俊	(30・31)
幹事	森 伸夫	(30・31)				幹事	加藤 博昭	(48・49)
幹事	道見 俊廣	(30・31)	幹事	荒木とよ子 (飯村)	(39・40)	幹事	津田 正克	(50・51)
幹事	小野 武	(30・31)	幹事	萩野谷 肇	(41・42)	幹事	後藤 善夫	(52・53)
幹事	宮尾 昌介	(30・31)	幹事	上田 定義	(41・42)	幹事	吉村しげみ	(元・2)
幹事	杉山 茂	(30・31)	幹事	加藤 久貴	(46・47)	幹事	鈴木知恵美	(2・3)
幹事	根岸 元宏	(31・32)	幹事	秋山 稔明	(46・47)	幹事	藤澤 博隆	(3・4)
幹事	加藤 三洲	(31・32)	幹事	前田 正丈	(47・48)	幹事	小野 和彦	(3・4)
幹事	渡部 浩司	(31・32)	幹事	藤本 哲生	(47・48)			
幹事	大村日出雄	(32)	幹事	野田 栄	(47・48)	幹事	遠藤日出夫	(37)
幹事	甲田 知由	(33)	幹事	棚橋 敏彦	(50・51)	幹事	渡辺 博夫	(37)
幹事	杉本 直志	(33)	幹事	小松真由美	(51・52)	幹事	江川 洋	(42)
幹事	市橋 悟	(34)	幹事	矢崎 真治	(53・54)	幹事	藤幡 俊量	(46)
幹事	朴澤 英憲	(34・35)						
幹事	吉野 洋一	(35)	幹事	渡辺 桂子	(60・61)	幹事	松原 裕二	(54~57)
幹事	横田 晋朗	(35)	幹事	林 尚美	(62・63)	幹事	井上 晶子 (贅川)	(54~57)
幹事	鈴木 肇	(35)	幹事	野室香世子	(2・3)	幹事	大木めぐみ	(2~5)
幹事	御供 政紀	(35・36)	幹事	小澤 知子	(5・6)	幹事	阪 朋子	(2~5)
幹事	小澤 文郎	(36)				幹事	小川 菊子	(2~5)
幹事	大西 良雄	(37)	幹事	宮下 正俊	(39・40)	幹事	藤島 あや	(3~6)
幹事	小川 武司	(37)	幹事	瀬村 隆治	(42・43)	幹事	間川 直子	(3~6)
幹事	多田清太郎	(37)	幹事	吉田 力	(44・45)	幹事	土屋 珠美	(3~6)
幹事	坂口 正剛	(37)	幹事	長倉 良幸	(44・45)	幹事	志藤由美子	(3~6)
幹事	小石川宣照	(37)	幹事	前山 良光	(45・46)			
幹事	谷崎 邦昭	(38)	幹事	早川 清文	(45・46)			
幹事	栗山 康雄	(39)	幹事	菅野 利幸	(45・46)			

任期 (H 8 .4.1~H10.3.31)

平成8年度役員

顧問	西村 満男 (21~23)	常任幹事	榎本 睦美 (45・46)	幹事	長谷川駿一 (23~25)
顧問	西村美枝子 (長谷川) (22~24)	常任幹事	西野 和衛 (望月) (46・47)	幹事	徳増 清二 (23~25)
顧問	中嶋 信行 (23~25)	常任幹事	江本 博勝 (46・47)	幹事	石野 進 (23~25)
顧問	奥田 吉郎 (23~25)	常任幹事	沼上 博美 (伊出) (48・49)	幹事	石垣 恭弘 (23~25)
顧問	瀬川 一男 (23~25)	常任幹事	関野 幹雄 (48・49)	幹事	井上 忠彦 (23~25)
顧問	宮沢 主計 (25・26)	常任幹事	大島 裕二 (52・53)	幹事	細田 昭次 (23~25)
顧問	渡辺 勝一 (26・27)	常任幹事	斎藤 聡 (54~57)	幹事	杉山 吉房 (23~25)
顧問	見上 勇逸 (27・28)	常任幹事	木村貴美和 (55~58)	幹事	服部 房夫 (23~25)
会長	鈴木 邦良 (27・28)	常任幹事	渡辺 桂子 (60・61)	幹事	浅海 武夫 (23~25)
副会長	小椋 貞夫 (28・29)	常任幹事	野田 正人 (62・63)	幹事	芹澤 克治 (24・25)
副会長	平井 千枝 (34・35)	常任幹事	久保 和之 (63・元)	幹事	石川 進 (25・26)
副会長	高田 菊平 (36)	常任幹事	廣岡 達郎 (元~4)	幹事	矢沢 知秋 (25・26)
副会長	山田 浩子 (41・42)	会計監査	山崎 光義 (44・45)	幹事	長倉 祐作 (25・26)
副会長	岩崎 一雄 (43・44)	会計監査	土屋 忠得 (40・41)	幹事	宮崎 茂樹 (25・26)
副会長	宮下 公雄 (54~57)	幹事	高田日出太郎 (21)	幹事	伊藤 悟 (25・26)
事務局長	佐野 勝己 (39・40)	幹事	馬場 康夫 (21・22)	幹事	辻 省二 (26・27)
常任幹事 (庶務担当)	久保田 勝 (38・39)	幹事	清 好一 (21~23)	幹事	田村 実 (26・27)
常任幹事 (庶務担当)	田中 由雄 (42・43)	幹事	石垣 義親 (21~23)	幹事	浅原 好胤 (26・27)
常任幹事 (会計担当)	宮川 守 (47・48)	幹事	小野 真一 (21~23)	幹事	宮崎 乾朗 (26・27)
常任幹事	木村 幸夫 (23~25)	幹事	米内 国夫 (21~23)	幹事	高橋 英明 (26・27)
常任幹事	白鳥 義仁 (25・26)	幹事	澤 直和 (21~23)	幹事	荒川 通 (26・27)
常任幹事	光信 儔 (26・27)	幹事	滝川 昇 (22・23)	幹事	岩永 勉 (26・27)
常任幹事	鈴木 義樹 (28・29)	幹事	中浜 卓弥 (22~24)	幹事	塩田 浩 (26・27)
常任幹事	角田 義廣 (30・31)	幹事	中塩 利雄 (22~24)	幹事	村野 静司 (26・27)
常任幹事	市川 紀子 (37・38)	幹事	北條 晃 (22~24)	幹事	大井 徹也 (26・27)
常任幹事	小出 博 (40・41)	幹事	長田 涉 (22~24)	幹事	稲葉 昭 (26・27)
常任幹事	柴田 正 (41・42)	幹事	山内 茂 (22~24)	幹事	吉田 昭二 (26・27)
常任幹事	土屋 貞明 (42・43)	幹事	川口 正信 (22~24)	幹事	熊崎 文二 (26・27)
常任幹事	小早川隆義 (42・43)	幹事	小林 昭雄 (22~24)	幹事	奥水 啓一 (26・27)
常任幹事	染谷 徳昭 (42・43)	幹事	金田 豊 (23~25)	幹事	廣田 均 (26・27)
常任幹事	渡辺 忠昭 (42・43)	幹事	小林 栄三 (23~25)	幹事	栗原 恒夫 (26・27)
常任幹事	林田 孝二 (43)	幹事	勝俣 敬充 (23~25)	幹事	黒滝 祐司 (27・28)
常任幹事	山口 良児 (43・44)	幹事	山本 康弘 (23~25)	幹事	小林 義尚 (27・28)
常任幹事	相田 信次 (44・45)	幹事	森下 菊美 (23~25)	幹事	田村 栄一 (27・28)
常任幹事	鈴木 正八 (44・45)	幹事	宝地 克哉 (23~25)	幹事	上野 実 (27・28)
常任幹事	久保田博明 (45・46)	幹事	播本 弘 (23~25)	幹事	関本 文彦 (27・28)
		幹事		幹事	真部 喜孝 (27・28)
				幹事	結城 勇一 (27・28)

第一条 本会は日本大学三島同窓会と称する。

第二条 本会は事務所を日本大学三島校舎におく。

第三条 本会は日本大学三島予科三島教養部、文理学部三島校舎、短期大学部三島、国際関係学部、大学院国際関係研究科の出身者による正会員と幹事会において本会に關係が深く功勞のあると認められた特別会員・名譽会員により構成する。

第四条 本会は会員相互の親睦と融和をはかり母校の發展に寄与すると共に母校建学の理念を社会に拡充することを目的とする。

第五条 本会は前条目的達成のために左の事業を行う。
一、会員相互の親睦と融和をはかるための諸事業。
一、母校の發展興隆に関する諸事業への協力参加。
一、その他目的達成のために必要な諸事業。

第六条 本会は目的達成のため左の機関をおく。
一、総会
一、幹事会
一、常任幹事会

一、事務局
一、地方支部

第七条 総会は本会運営上の諸事項についての報告を受けこれを承認する。

第八条 総会は年一回開催するものとし会長がこれを招集する。

第九条 幹事会は総会の代行決議機関とし左の事項を付議し、これを議決する。

第十条 幹事会は年二回以上開催するものとし会長がこれを

招集する。幹事会三分の一以上の要求があつた場合は臨時に招集しなければならない。

第十一条 常任幹事会は本会の執行機関として本会の実質的運営にあたる。

第十二条 常任幹事会は必要に応じて随時会長がこれを招集する。

第十三条 常任幹事会は必要に応じて随時会長がこれを招集する。

第十四条 本会は地方に支部を設けることができる。

第十五条 本会に左の役員をおき、

日本大学 三島同窓会規約

総会において選出する。

常任幹事・名譽役員は別の基準に従つて選出する。

会長 一名
副会長 若干名
事務局長 一名
常任幹事 若干名
幹事 若干名
會計監査 二名
顧問 若干名
参与 若干名

第十六条 会長は本会を代表し会務を統理する。

第十七条 副会長は会長を補佐し、会長事故ある時はこれに代る。

第十八条 事務局長は事務を統理し、本会運営に必要な一切の事務事項を遂行する。

第十九条 常任幹事は幹事の互選により選出し、常任幹事会を構成し、本会業務の執行にあたる。

第二十条 幹事は幹事会を構成し、本会運営の諸事項の議決にあたる。

第二十一条 會計監査は本会會計の監査にあたる。

第二十二条 顧問・参与は幹事会の議を経て会長が委嘱し本会運営上の諮問にあたる。

第二十三条 各役員任期は二年とし、重任をさまたげない。

第二十四条 本会の経費は会費並びに寄付金その他の収入を以てこれに充てる。

第二十五条 会員は終身会費として金参千円を、日本大学三島會計課に納入すること。

第二十六条 本会の會計年度は四月一日に始まり翌年三月三十一日に終る。

第二十七条 本会の目的および事業に貢献したものは幹事会の議を経て、これを賞することができる。

第二十八条 会員で会員としての名譽を棄損する行為があつたときは幹事会の議を経て罰することが出来る。

第二十九条 本会の運営に必要な細則は別に定めることができる。

第三十条 本会則は昭和四十一年十一月三日からその効力を発する。

昭和五十二年十一月改正
昭和五十五年十一月改正
昭和五十八年七月改正
昭和六十二年十一月改正
平成元年十一月改正
平成三年十一月改正